

# あら物狂おしの翁や

—貞享三・四年の芭蕉—

濱 森太郎

## 一

貞享二年（一六八五年）四月末、松尾芭蕉は、約九箇月に及ぶ甲子吟行の旅を終えて無事江戸に帰り着いた。そしてこの時すでに、彼は、江戸蕉門の軽佻浮薄な句作りに不満を抱いていたが、まだ、彼らとともに「能（き）句帳」（貞享二年正月付、半残宛書簡）を出版する望みを失なっていたわけではなかった。彼は、その句帳のために、江戸帰着直後から句稿の整理・改訂を怠らなかつた。その一端は、貞享二年五月十二日付千那宛芭蕉書簡に、次のように報じられている。

一、愚句其元二而之句

辛崎の松ハ花より臚にて と

御覚可被下候。

山路来て何やらゆかしすミれ草

其外五三句も有之候へ共、重而書付

可申候。

主旨は、大津の千那宅での芭蕉の発句が、「辛崎の松は花より臚にて」の句型で治定した事を伝えるものだが、その他に「山路来て」の句を引いて、甲子吟行の収穫も何やらおぼめかし気味に語られている。「其外五三句も有之候へ共」という言葉に接すれば、ことに入門後間

もない千那が、甲子吟行の成果や新風の正体を尋ねて耳をそばだてる事くらいは、当然芭蕉も承知していたはずである。そして、この書簡がもととそういう予想のもとに書かれたとすれば、芭蕉は、この「辛崎や」の句と「山路来て」の句とを無分別にここに引用したのではない事になる。つまり、彼は、この二句によって自分の新風の正体を千那の前にもつとも簡便に要約してみせた事になるのである。それでは、ここに要約された新風の正体とは、いったい何だったのか。

## 二

辛崎の松は花より臚にて、

芭蕉

連句の法式の中で「にて留」第三の格と定められてきたその「にて留」の句をもつて、わざわざ発句なりと主張するには、発句に對するよほど透徹した見識を必要とする。また、それを主張する際の周囲の混乱を引き請けるだけの覚悟も必要である。その意味で、この句を破格のままであえて治定したと報ずる芭蕉の言葉は、あきらかに一つの決断を経ている。問題は、その決断の内実である。

衆知のように『去来抄』（先師評）は、この発句の「にて留」をめぐる

去来と其角との争論を伝えているが、その争論を耳にした芭蕉は、「角・来が弁皆理屈なり。我はたゞ花より松は臍にておもしろかりしのみ。」と一蹴した。

この言葉に明らかなように、この時期の芭蕉にとって、発句は、何よりもまず端的に「感動」の表現でなければならなかった。『三冊子』風にやや厳密に言えば、それは、「物の微に感じて動く作者の心のゆらめきそのものを、それ固有の句と温もりとを損わずに生き生きと表現する事にはかならない(注1)。そのことのために、芭蕉がしばしば苦心惨憺して臍腑をしばった事は『三冊子』に詳しいが、今その一端を示せば、次のようである。

まず、元禄四年春(注2)の発句「雲雀鳴く中の拍子やきじの聲」については、

長閑なる味を取らんと色／＼して是に究る。

と言ひ、また元禄三年冬の発句「から蛙も空也の瘦も寒の内」については、

心の味をいひとらんと數日腸をしぼる。

とも言ふ。さらにさかのぼって、貞享四年冬の発句「旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」については、

心のいさましきを句のふりにふり出して、呼ばれむ初時雨とはいしと也。

と言ひ、また、貞享二年夏の発句「梅こひて卯の花拜むなみだかな」については、

物によりて思ふ心を明す。

とも言ふのである。

このように、発句に表現された物の姿は、芭蕉にとってあくまで、心を表現するための手段として厳密に選択されていた。したがって、

このような芭蕉の発句を、単に作品の形象面からのみ評価する事は避けなければならない。

かつて本居宣長は、『石上私淑言』の中で、「物思うときは、常よりも、見る物きく物に心とまりて、ふと見出す雲霞木草にも目のつきて、つく／＼と見らるゝものなれば、かの物おもふ事を、奈我牟流という云々」と眺むる「心を解いた。芭蕉もまた、その「眺むる」心を表わそうと苦心しているのである。したがって、私たちは、なに気ない芭蕉の「眺め」に眼を凝らし、彼の心の物おもひを窺う必要がある。先の「辛崎の」発句にしても、また「山路来て」の発句にしても、この例外ではない。

しかし、そうした芭蕉の意図とは関りなく、この時期の芭蕉の発句は、すでに彼自身さえも驚くような奇妙な反響を生みつつあった。

### 三

『野ざらし紀行』に寄せられた山口素堂の序文(長文型、注3)によれば、芭蕉の発句は次のように評価されている。

しばらく故園にとゞまりて、大和廻りすとて、わた弓や琵琶になぐさみ、竹四五本の風かなと隠家によせける。此両句をとりわけ世人もてはやしけるとなり。しかれ共、山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、此吟行の透逸なるべけれ。

(巴静本『野ざらし紀行』素堂序)

要約すれば、

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

蔦植て竹四五本のあらし哉

の両句を透逸とみる「世人」に反して、山口素堂は、

山路来て何やらゆかしすみれ草

道のべの木槿は馬にくはれけり

の両句こそ透逸だと主張している。したがって、その限りで言えば、素堂の評価と芭蕉の評価とはおおむね一致しているかに見えるだろう。

しかし、評価の結果ばかりに目をうばわれてはならない。問題はその評価の内実にある。当時、江戸蕉門を代表する句集『続虚栗』の序文を草して、同じく山口素堂は次のように言う。

古人いへる事あり。「景の中に情をふくむ」と。から歌にていはば「穿花蛺蝶深見、点水蜻蜓疑飛」。これこてふとかけろふは所を得たれども、老杜は他の国にありてやすからぬ心と也。まことに景の中に情をふくむものかな。やまとうたかくぞ有べき又き、し事あり。「詩や哥やこ、ろの絵なり」と。(『続虚栗』素堂序、注4)

素堂は、杜甫の詩を「景の中に情をふくむ」作の見本として掲げ、このような句を作ろうと示唆している。しかし、この素堂の発言が、当時世上に流行していた漢詩風の「景情論」を安直に引き写したにすぎない事は、すでに衆知の事実である(注5)。そもそも素堂のごとく、「穿花蛺蝶深見、点水蜻蜓疑飛」という詩句を読んで、「老杜は他の国にありてやすからぬ心と也」と杜甫の「眺め」の心を解説された後に、ようやく「まことや景の中に情を含むものかな」と納得するようでは、この表現に含まれた杜甫の「眺め」の「心」が生き生きと読者の胸に了解されたとは言えないのである。だが、その点、素堂はまったく無頓着で楽天的でさえある。芭蕉にとつては、「数日賜をしるる」ような課題が、ここでは極めて安直に持ち出されているのである。例としてその安直さは勿論、山口素堂ひとりのものではなかった。例えば芭蕉の発句、

古池や蛙飛こむ水のおと

の好評を背景に、言わば、新「眺め」の研究を目論んだ句集『蛙合』(貞享三年閏三月刊、仙花編)の最初の四句も次のようなものだった。

- ① 古池や蛙飛こむ水のおと 芭蕉
- ② いたいけに蝦つくばふ浮葉哉 仙花
- ③ 雨の蛙声高になるも哀也 素堂
- ④ 泥亀と門をならぶる蛙哉 文鱗

これらを見ても、仙花の句と素堂の句とは、ともに蛙によせる作者の心情が感情語を用いてあからさまに表現されている。また一方、それを抑えてただ蛙の形象だけを提示した文鱗の句は、しかし、表面的な見立ての面白さに終始して芭蕉の句のような事実の重みがない。また人生的な深まりもない。彼らにとつて眺める事は、ただ物を見過す事にすぎなかったのである。

同様に、『葛の松原』(元禄五年刊、支考編)は、先の「古池や」の発句の初五に「山吹や」の五文字を置こうとした其角の姿を伝えているが、このエピソードもまた、其角にとつて、「眺める」事が、さながら一幅の俳絵のごとく視界を合成する事だった事を如実に示している。ここでは、「詩や歌や心の絵なり」という主張の内から「心」が脱落して、ただの「絵」としてしか理解されていないのである。

ここにも芭蕉と其角との大きな落差がある。

そして、この両者の見識の落差は、当然彼らの作品評価の喰い違いとなって表面化する。まず、内面の感興を、物の心象を通じて再現しようとする芭蕉にとつては、先に山口素堂が「透逸」と評した次の叙景句二句、

(一) 山路来て何やらゆかしすミれ草

道のべの木槿は馬にくはれけり

も、また「世人」のもてはやした次の叙景句二句、

(二) わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

薦植て竹四五本のあらし哉

も、またさらに次のような『野ざらし紀行』のやや抒情的な発句群、

(三) 野ざらしを心に風のしむ身かな

三十日月なし千とせの杉を抱くあらし

手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜

露とくく心見にうき世す、がはや

なども、ともに作者の心に映えた一瞬の心象をよく捉えて、その心の諸相を表現し得た点で、それ相應に評価できる作品だったはずである。ところが、「詩や哥やこ、ろの絵なり」と表現の形象性を重んずる其角らの見識からすれば、これらの発句は、比較的形象度の高い(一)から(二)、(三)の順に見劣りするものとなる。つまり、芭蕉にとっては本来等価であるはずのこの時期の彼の発句が、其角たちにとっては玉石混攪とみえるのである。しかも、その玉石の「玉」と認められた芭蕉の発句の内、例えば、

古池や蛙飛び込む水の音

山路来て何やらゆかしすミレ草

などは、皮肉な事に、江戸蕉門の志向する新風の見本としてこの後、広く宣伝されてゆくのである。

#### 四

さて、貞享二年四月末、江戸に帰着して以後約一年間を、芭蕉はこうした奇妙な好評の中でおそらく、居心地の悪さを感じながら、過した。彼は、その間、比較的マジメに江戸蕉門の一座する俳席をつとめている。しかし、この間に満尾した連句の数は、貞享二年六月二日の「涼しさの」百韻、また翌貞享三年正月、宗匠立机早々の其角をかこむ「日の春を」百韻、さらに同年三月二十日の「花咲て」の歌仙と数えて

みても、三巻にすぎない。またさらに、これ以後貞享三年の末までに満尾した連句は一卷もない。これを貞享四年の一年間に満尾した連句十一巻と比較すれば、その少なさがわかるであらう。しかも、かううじて満尾したこれら三巻の連句は、いずれも儀礼的なもので、新風の完成を願う芭蕉の意にかなうものではなかった。すでに別稿にも述べたようにここに一座した江戸蕉門の面々は、『冬の日』の新風の根本をまったく誤解して、そこからただ平明な客観描写の手法のみを継承したのである。それは、平明な「景気」の句をもつて新風とする彼らの主張の連句篇として迎えられたと言ってもよい(注9)。

しかし、それにもかかわらず、芭蕉はかなり辛抱強く彼らに付き合った。試みに、『初懷紙評注』(貞享三年成立) から其角の句に対する芭蕉の批評を引用してみよう。

(憎まれし宿の木槿の散たびに

後住女きぬたうちく)

文隣) 其角

後住女は、後添の妻といはんため也。「憎まれし」と言にて、後添の物ごと和せざる味をこめたり。(中略) 翫味浅からず(注7)。

この付合であれば、礎の伝統から言っても、一人住居の女が、礎を打ちつつ、木槿の花の散り際を愛した夫をしのぶと解するのが通例である。したがって前句の「憎まれし」は、当然「愛しみ」を意味する「にくむ」である。また付句の「後住女」も、「後添の妻」ではない。だが、芭蕉はおそらくそれを承知の上で、あえて「憎む」を憎しみの意と解し、「後住女」を「後添の妻」と曲解している(注8)。そう曲解する事で、あるいは其角の句に新味を持たせようとしたのかもしれない。だがその結果、彼は、前句の「木槿の散たびに」という優雅な表現を黙殺してしまった。そして、それでもなお「翫味浅からず」と評している。苦しい批評である。

また、次のような例もある。

(葉分の風を矢筈切に入る

か、れとて下手の懸たる狐わな

藪陰の有様、あり／＼と見へ侍る。しかも句作風情をぬきて、たゞ有のまゝに言捨たる句続き、心を付べし。

芭蕉の言葉のごとく「風情をぬきて、たゞ有のまゝに言ひ捨たる句続き」がよいのなら、其角の句の「か、れとて」という説明的な表現は明らかに失格である。したがって、また、この其角の付合をもって

「藪陰の有様、あり／＼と見へ侍る」とは、いかにも苦しい評価ではないか。

さらに、同じく其角の、

(とく起て聞き勝にせんほと、ぎす

船に茶の湯の浦哀なり

という、やや込み入ったさしてもない付合を評して、

(中略)思ひがけぬ所にて茶の湯を出すは茶窓の好士なり。されば、思ひよらぬ物を前句におもひ寄せたる、又俳諧の逸士也。

と、ことごとしく誉め上げるに至っては、もはや閉口ではあるまいか。同様の事は、コ斎の句に対する芭蕉の批評にも言える。

(後住女きぬたうち／＼

山ふかみ乳を呑猿の声かなし

(中略)「乳を呑猿」といふにて、「女」といふ字をあしらひたる也。幽なる意味しかもよく通じたり。

亡き子を忍ぶ母の悲しみを強調するために子猿の声を持ち出す意図は読める。ただ、それを強調するあまり「乳を呑猿の声かなし」とまで言ってしまうはいけない。それでは対象の捉え方があまりに分析されすぎて悲しみにくれる母親の非分析的な情動からは遠く隔ってしまう。

コ 斎  
其 角

芳 里  
其 角

だが、芭蕉はその意図のみを汲んで表現を無視し、「幽なる意味しかもよく通じたり」と誉め上げる。

また、次の例も同様である。

(罌子咲て情に見ゆる宿なれや

葉分の風を矢筈切に入

枳 風  
コ 斎

(中略)前句、民家にして、武士の若者ども与風瑠らしき物陰など見付たる躰也。

大形は物語などの躰をやつしたる句也。

或は中将なる人の鷹すへて小野に入、浮舟を見付たるなどのためしならん。されども其故事を言にはあらず、其余情のこもり侍るを意味と申すべきか。

矢筈を切るために竹藪に入つた「武士の若者ども」が、「与風瑠らしき物陰など見付たる躰」を表現したと芭蕉は言う。だが、そのふと「見付たる躰」を強調するために持ち出された「葉分の風を」という「あしらひ」が下に続く際に、一句としての必然的なまとまりを欠いた小細工に終わっている事も見逃してはなるまい。だが、芭蕉はその点にはまったく触れず、「余情のこもり侍るを、意味と申すべきか。」と批評する。これもまた、いかにも手加減の見え透いた批評である。

芭蕉の付き合ひの良さもここまで来ると何やら苦々しいが、そもそも自分の意に満たぬこの「日の春を」百韻に自註を加える事自体が、彼にとつてははなはだ苦痛だったのだ。そのような場合、もっとも良い方策が三十六計逃げるにしかずだという事は言うまでもないだろう。それかあらぬか、芭蕉は病氣と称してこの百韻自註を五十句までで打ち切った。

そして一方で、彼は、貞享三年閏三月十六日、寂照に宛て「何角障事共心にまかせず候而、いまだ在庵罷有候。」と逃げ仕たくのままなら

ぬ事を告げている。また、同じく閏三月十日付去来宛芭蕉書簡にもほぼ同様な事実が記されている。とすれば、早ければ貞享二年冬あたりから、すでに芭蕉は江戸脱出を考え、その計画を上方の門人達に伝えていた事になる。また、それと符節を合わせるかのように、貞享二年師走の芭蕉の発句「月白き師走は子路が寢覚哉」は、彼の江戸蕉門に對する苦々しさをよく伝えている。言うまでもなく「師走の月」は、すさまじい人の心の象徴であり(注9)、「子路」はその人の世に孔子の「志」を実現せんとした壮士である。その壮士の世俗に對する悲憤を、芭蕉は今、わがものとしている。ふりかえって貞享二年七月十八日、近江の千那に宛てて、

坂本の鹿いづれの秋にかと存る計に御座候。罷歸候へば、又いつ上り可申様にも無御坐、一入く御ゆかしきのみに候。

と再度の上京のおぼつかなきを書き送った芭蕉が、わずか数箇月でその氣持を変えていたのである。

だが、ともかくこの貞享三年閏三月、芭蕉は「何角障事」どものために、江戸脱出の計画をいったん中止した。そしてその時点では、次の上京の目やすはおおむね貞享三年秋頃と定められていた。だが、その貞享三年秋も過ぎた十月二十九日、芭蕉はふたたび寂照に宛てて

拙者も当年上京可致候へ共、もはや寒氣に移候故思ひ留り、来年はかならず上り候而可御意候。

とことわり、さらに同年十二月一日にも、

当夏秋之比上り可申覚悟に御坐候へ共、何角心中障る事共出来延引、浮生余り自由さに心変猶々難定候。

と書き送っている。また芭蕉は、翌貞享四年一月廿日にもやはり寂照に宛てて、

何とぞ当年は又々上京、可御意と存候。

と書き、さらに貞享四年春の書簡でも

夏中可御意候

と書き送っている。そしてその他、貞享四年三月十日付と推定される書簡でも、芭蕉は、尾張熱田の門人東藤と桐葉とに宛てて、

凡天下の俳諧にて御坐候門、随分御敬候て御はげみ可被成候。秋登り候は、一板行とす、み申候。

と書き送っているのである。

このように、芭蕉は、ことに尾張の寂照に宛てては、前後五回も旅立の遅延をことわる書簡をしたためている。そして、それにもか、わらず、芭蕉の旅立はさらに貞享四年十一月まで延期されてしまった。

したがってよほど重大な事情があったものと思われるが、その事情については、貞享三年閏三月十六日付の書簡では「何角障事」どものためだと言ひ、貞享三年十二月一日付の書簡でも「何角心中障る事」どものためだとしか記されていない。これはいかにも曖昧な言い廻しだが、例えば、同じ十二月一日付の書簡に搜入された「此比ハ発句も不仕、人のも不承候」という一文からは、明らかに芭蕉の江戸蕉門における孤立が匂ってくるはずである。また事実、貞享三年秋(注10)「蓑虫の声を聞きに来よ草の庵」という芭蕉の招きに応じて芭蕉庵を訪ねた服部嵐雪は、芭蕉の憔悴ぶりに驚いて、

おとろへをくらぶれば霜蓬いまだ壮なりしか。ことちからを論ずれば、風柳猶つよし。(蓑虫を聞に行辞)

と芭蕉のやつれざまを書き記している。

さらに、また芭蕉自身、同じく貞享三年冬の「閑居の箴」(本朝文鑑)の中で、そのすさまじい孤独を、次のように描いている。

日比は人のとひ来るもうるさく、人にもまみえじ、人をまねかじと、あまた、び心にちかふなれど、月の夜、雪のあしたのみ、

友のしたはる、もわりなしや。物をもしはず、ひとり酒のみて、心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるおし、の翁や。

酒のめばいとど寐られね夜の雪

かくして、「何角心中障る事共出来延引云々」と、旅立の中止を曖昧に語る芭蕉の心中に、まことに憂鬱な孤立感が渦巻いていた事は明らかであろう。この彼の孤立感が、江戸蕉門の人々に対する芭蕉の失望に根差している事は言うまでもない(注11)。彼の嘆きを彼の愛した謡曲風に言えば、げに「得難きは時、逢ひ難きは友なるべし」(謡曲、西行桜)とでも言うべきだろうか。

## 五

ところで、繰り返して言うが、この時期の芭蕉が、ただいたずらに、時と友とに恵まれぬ我身の不運を嘆いて、ついつい旅立を延期したと言うわけではない。例えば、『続虚栗』所収の「素堂序」は、次のような興味深い事実を伝えている。

来る人のいへるは、「われも又さる翁のかたりける事あり。『鳩の浮巢』の時にうき、時にしづみて風波にもまれるがごとく、内にこゝろざしをたつべし」となり。余笑ひてこれをうけがふ。いひつゞくればものさだめに似たれど、屈原楚国をわすれずとかや。

『鳩の浮巢』にたとえて内なる志の持続を説くこの「さる翁」が芭蕉を暗示している事は、「翁」という呼称からも容易に推測できる。また、

「われも又さる翁のかたりける事あり」という素堂と来客との話しぶりからみて、芭蕉は素堂ほか幾人かの人々にこの内なる「志」の持続を説いて廻った事が明らかである。そしてそれらの人々の中に磐城藩主内藤風虎の二男内藤露沾が含まれていた事は、貞享四年夏(注12)。芭蕉

から露沾に送られた発句、

○五月雨に鳩の浮巢を見にゆかむ

に明示されている。また、ひるがえって貞享三年正月の芭蕉自身の歳旦吟。

○幾霜に心ばせをの松かざり

は、新年にあたってその内なる「志」の健在ぶりを己の胸に確かめたものであり、さらに同じく貞享三年秋によりやく定稿となった『野ざらし紀行』の主題とも言える発句、

○露とく／＼心みに浮世す、がばや

も、その内なる「志」の一端を世間に宣言したものである。さらにまた、この時期芭蕉がもつとも愛した名古屋の杜国についても、各務支考は『葛の松屋』の中で「杜国は心ざしのおのこなるよし」と言い、さらに芭蕉自身も『嵯峨日記』の中で杜国について「我に志深く、伊陽旧里までしたひ来りて」、あるいは、「其志我心裏に染て忘る、事なければ云々」と記している。

このように、この貞享三年から四年にかけて、江戸蕉門から孤立した芭蕉は、むしろ積極的に打って出て、自分の思想を説いて廻った事もあったのである。彼が新風を推進するためには、何よりもまずこの風雅と人生とを統一する詩人の「志」を持続する事が必要だったのである。しかも、その「志」を持続する事によって、詩人の「志」を忘れ頼廃に頻する江戸蕉門の詩精神を恢復する事もできる(注13)。

しかしながら、江戸蕉門の反応はきわめて冷たかった。その何よりの証拠が先に見た芭蕉の憔悴ぶりである。また芭蕉の親友の山口素堂さえ、「余笑ひてこれをうけがふ。いひつゞくればものさだめに似たれど、屈原楚国をわすれずとかや」(『続虚栗』序)と軽く芭蕉の志を肯定するだけで、さらに進んで客人を勧誘するつもりはない。他の門人

たちは推して知るべしであろう。もともと点取俳諧の流行するような江戸俳壇の享樂的な精神風土は、芭蕉の〈志〉とは、あまりにかけ離れていたのである。そうした状況の中で、先に見たごとく、芭蕉は、たびたび旅立を考え、さらにそれを中止した。そして逆に「閉門」を考え、また事実それを実行した形跡もある。先に引用した貞享三年冬の「閑居の箴」の「人にもまみえじ、人をもまねかじとあまた、び心にちかふ」という言葉や、同じく貞享三年秋の「蓑虫ノ説跋」の「草の戸さし、こめてもの佗しき折しも、偶蓑虫の一句を言う」という言葉などがその事を暗示している。

かくして、貞享三・四年当時の芭蕉の変転極りなり「心変り」が明らかだが、しかしそれに驚いてはなるまい。旅立つといつてみたり、閉門するといつてみたり、見方によればそれはいずれも江戸蕉門にゆさぶりをかけるための芭蕉一流のストライキなのだが、そのような戦術を駆使しながら、芭蕉は、もちろん今、自分が江戸を旅立つ事の功罪を十分に計算していただろう。芭蕉が今江戸を旅立ってしまったば、蕉門の本拠地江戸がかえって蕉風から遅れ、ひいては、これからの新風開拓の上でも芭蕉の足手まといとなる、それを見越して、芭蕉は、おそらく江戸脱出に踏み切れないのである。したがってその悩みを抽象化すれば、それはすなわち、帰俗と離俗の問題という事になるが、その問題をめぐって、確かにこの時期の芭蕉はしばしば立往生した。その様子は、その問題を主題とする謡曲『西行桜』、その中でも特に帰俗と離俗の主題が表面化する「夜遊」の場の詞書をそっくりそのまま前書として写し取った次の二つの発句に現われている。

毘沙門堂の花盛、四王天の栄花も是にはいかでまざるべき。

うへなる黒谷・下河原。むかし遍昭僧正のうき世ヲいとひし花頂山、驚の深山の花の色、枯にしつるの林までおもひしら

れて哀なり。

観音のいらかみやりつ花の雲（眞蹟詠草）

しかるに花の名だかきは、先初花を急ぐなる近衛どの、糸櫻、見わたせば、柳さくらをこきまぜて、みやこは春のにしき散乱たり。

花の雲かねは上野か浅草か（蕉翁全伝）

この謡曲『西行桜』は、衆知のように京都西山の草庵に門を閉じて、庭の桜の散りざまにひとり無常を觀じていた西行法師が、ある夜、桜の精に導かれて、下京あたりの花見客たちとともに夜遊の歓を尽くすという夢幻能の一つで、先の二つの前書に続いて、

すはや數そふ時の鼓

後夜の鐘の音、響ぞ添ふ。あら名残惜しの夜遊やな。惜むべし、惜むべし。得難きは時、逢ひ難きは友なるべし。云々

という桜の精の詞が続いている。

一篇の主題は、その夜遊の場で、桜の精が西行に向って語る言葉、すなわち「浮世と見るも山と見るも唯その人の心にあり。」や、「惜むべし。得難きは時、逢ひ難きは友なるべし。」という先の引用部分の言葉に尽されている。つまり、西行の眺めたごとく諸業はむろん無常であるが、だからこそ、かえってその諸業を大切に生きねばならない。

ことに、それが逢い難い「友」を得たかけがえのない「時」であつてみれば、それはなおさらである。俗を離れると言ひ、俗に帰るとも言うが、自分の住家を「浮世と見るも山と見るも唯その人の心」のあり様にかかっているのだ。桜の精が、離俗の隠者西行の心得ちがいを衝いて、こう説くところが一篇の主題である。劇の中で、「夜遊」の夢



がさめた後、ひとりしみじみとこの桜の言葉の反芻する西行の心中が、当時の芭蕉の心中と極めて近い事は言うまでもないだろう。

芭蕉は、そういう『西行桜』の場面設定をそっくりそのまま自分の発句の場面として取り入れている。

したがって、まず「花の雲鐘は上野か浅草か」の場合も、芭蕉がここで聞いている「かね」の音は、実際の上野・浅草あたりの寺院の鐘の音と、『西行桜』の「夜遊」の終わりを告げる「後夜の鐘の音」とが二重に響いていると解釈すべきであろう。そうすれば、この発句に描かれた時刻が外ならぬ「後夜の鐘」の刻、つまり明け方であり、したがって人間の覚醒にはやや早い時刻である事も見えてくる。だがそれにもかかわらず、芭蕉はその時刻にただ一人目醒めてちょうど劇中の西行のように鐘の音のあり所を尋ねている。というより芭蕉は、劇の中の西行になりかわって「夜遊」の終わりを告げわたる先ほどの「後夜の鐘の音」を、名残惜しげに思いかえしているのである。その時、芭蕉の心に、例の「得難きは時、逢ひ難きは友なるべし」という桜の精の詞が改めてかたく噛みしめられていた事は容易に想像できるであろう。そして一方、この発句と対をなす先の「観音のいらかみやりつ」の発句は、その同じ光景、同じ心持ちを主として視覚を通して捉えようとした作品である。芭蕉は、「月の夜、雪のあしたのみ、友のしたはる、もわりなしや」(閑居の箴)と言うが、人恋しさなら花の散る日はなおさらであろう。したがって、そのような芭蕉の孤独と人恋しさをもっとも集約した俳文「閑居の箴」の中でも、ことに「あら物くるおしの翁や」というこの一言こそ、当時の芭蕉の心中を語るにもっともふさわしい言葉だと、私は考え、本論の表題としたのである。

## 七

さて、以上のように、貞享三年から四年にかけて、江戸蕉門から孤

立していた芭蕉の心中は、「得難きは時、逢ひ難きは友なるべし」という思に集約される。江戸蕉門の面々を相手とした新風の試みはすべて失敗し、内なる「志」の主張も冷たくあしらわれた。また、彼が新風の充実を目指して整理・改訂した彼の発句も、さらに独創的な俳諧の紀行文『野ざらし紀行』も、彼の意図とは掛け離れた作品として理解された。そうした状況の中で、彼が何をどのように試みたかは、また別の機会を待って書きたい。ともかくその間、彼はたびたび江戸脱出を思い、さらにそれを思いとどまった。そしてその一方で、彼の本当の旅立が刻々と迫っていた。

——一九七七・五・二十三稿了——

注1 栗山理一著『芭蕉の俳諧美論』288頁参照。

注2 元禄三年春。元禄二年春の可能性もあるが、いちおう通説に従う。

注3 素堂序は本来跋文の型で書かれているので素堂跋と言ってよいのだが、別に「素堂跋」と呼ばれる一文があるので混乱をさけるために通称に従い、素堂序と称した。

注4 引用は、古典俳文学大系6『蕉門俳諧集(一)』所収本文による。

注5 上野洋三「詩の流行と俳諧」(『文学』1973、11月号)による。

注6 拙稿『春の日の光芒』(『国文学』77号)参照。

注7 引用は古典俳文学大系5『芭蕉集』所収本文による。以下同じ。

注8 憎まれし宿の木槿の散たばに 文隣

後住女きぬたうちく 其角

山ふかみ乳を呑猿の声かなし コ齋

この付合の展開から考えても、其角の句に「後添」の女の悲しみを表現する意図は見あたらない。また「憎まれし」は、原本「にくまれし」。

注9 『源氏物語』(総角)には「人の世のすさまじきことにいふなる師走の月夜」とある。

注10 通説では、この「養虫」の発句は貞享四年秋の作とされるが、この発句に触発されて成った山口素堂の「養虫の説」を下敷きにした付句「親は鬼子

は口おしき糞虫よ」(続虚栗「啼くも歌仙」が、すでに貞享四年春には作られている。したがってこの句は貞享三年秋の作と考えられる。

注 11 貞享二年四月末、江戸に帰りついた芭蕉は、江戸蕉門の詩心の頽廃を一掃すべく努力していた。後述。

注 12 貞享三年夏の可能性もあるが、一応通説に従う。

注 13 〔志〕をめぐる芭蕉と江戸蕉門の人々との落差については、拙稿「甲子吟行の功罪」(『日本文学』昭和51年9月号)を参照していただきたい。

付記

本稿は昭和53年度広島大学国語国文学会春季研究集会の席上の発表原稿をもとに加筆したものである。席上、磯貝英夫先生・米谷巖先生・阿満誠一氏の御意見をいただいた。記して深謝する。